

## ICMM-2014 に出席して

分子磁性国際会議 (International Conference on Molecule-Based Magnets, ICMM) は分子磁性分野の代表的な研究者が一堂に会する場として知られ、アジア・米国・欧州を巡回して隔年で開催されてきました。この夏のザンクトペテルブルグ (ロシア) で 14 回を数えます。会期は 7 月 6 日から 9 日までの 4 日間と、開催地の緯度を反映して常より若干早い、よい気候の時期が選ばれました。そのせいもあってか、前回のフロリダを超える 340 名あまり (内、日本から 80 名) の参加者があったと聞いています。

今回のプレナリー講演は、サラゴサの測定グループを率いてきた F. Palacio 教授 (ICMA)、現地ノボシビリスクのグループからリドベリ原子対のフェルスター共鳴や量子コンピューターを研究している I. Ryabtsev 教授、そして数々の籠状分子で知られる藤田誠教授 (東京大学) が担当されました。Palacio 教授の講演はとくにこの分野の創設に努めた故オリビエ・カーンの名を冠したもので、物理系グループの主らしく  $^{111}\text{In}$  radio-imaging など珍しい測定手法も紹介され興味深いものでした。一方、スピנקロスオーバー錯体の専門家 A. Bousseksou 教授 (Toulouse) のプレナリー講演はキャンセルとなり、やや残念でした。

招待講演 24 件のうち、日本からは MX 鎖や量子磁石の創成で著名な山下正廣教授 (東北大学)、MOF 磁性体の第一人者である大場正明教授 (九州大学) とシアノメタレート錯体をシントンとして多数の機能性化合物を創出してきた佐藤治教授 (九州大学) の発表がありました。佐藤教授は当センターとも多くの共同研究を進めている先生ですが、基底スピン量子数  $S = 45$  と世界記録を更新したケプラー多面体型スピנקラスタを紹介し注目を集めていました。全体を見渡しての発表内容の傾向は、単一分子磁石や単一次元鎖磁石の合成ラッシュが一段落し、その性質を生かした現象の探索が成果を出し始めていることもあって、各地のグループから表面担持やナノギャップ電極にマウントした分子のスピン트로ニクス、走査トンネル分光などの報告が相次ぎました。もちろんその嚆矢は招待講演をされた山下教授の希土類フタロシアニンダブルデッカー系を対象とした精力的な研究です。また私的には、共同研究で滞在したバルセロナの Veciana グループから C. Rovira 教授と I. Ratera 博士が招待講演し、懐かしく聞いたこと、コーヒーブレイクにはフロリダの S. Hill 教授やモデナの A. Cornia 教授と旧交を温めたことが印象に残っています。

アカデミックな内容を離れると、7日の晩のエクスカーションは白夜ツアーと題して、市内を流れるネバ川のクルージングでしたが、深夜に海から入る貨物船を通すために大きな跳ね橋が次々に開いてゆくさまに、参加者は歓声をあげました。ただ跳ね橋を追いかけてずいぶん上流まで遡上し、さらに帰路は橋が渡れないためバスが大きく迂回したため、帰着したのが朝4時と、翌日の午前のセッションの出席者が減ってしまったのはご愛嬌でしょうか。最終日にはバンケットが行われ、みなロシア料理に舌鼓を打ち、コサックダンサーの妙技を鑑賞しましたが、組織委員長の V. Ovcharenko 教授が壇上でいきなり朗々と「マイウェイ」を歌い上げるや、会場はダンスパーティーと化し、分子磁性の重鎮が次々と踊り始めたのには度肝を抜かれました。内気な日本人参加者の中では、武田定教授（北海道大学）が唯一ダンスを披露し、なんとか面目を施しました。いろいろと記憶に残る会議だったことを記して、報告いたします。

（中野元裕）



バンケットのひとこま。過去の開催地の代表者が壇上に勢揃いした。